2024年度地域協働フィールドワーク

活動報告書

2025年2月発行

目次

p.1　目次

p.2　はじめに

p.3　メンバー紹介

p.4　4～6 月準備

p.5　事前訪問

p.7　事前訪問を終えて、本訪問に向けて

p.8　本訪問

p.9　個人プロジェクト―アルバム

p.10　個人プロジェクト―インタビュー

p.12　本訪問―居酒屋てん

p.14　個人プロジェクト―映画上映

p.16　個人プロジェクト―何でも隊

p.17　個人プロジェクト―ちびっこランド

p.18　本訪問を終えて

p.19　十月祭

p.21　おわりに

※表紙の写真は、8 月の本訪問 3 日目にシーカヤック体験をさせてもらった時に撮影した写真です。

はじめに

この活動の母体は、北海学園大学経済学部の学生を対象とした特別講義「地域インターンシップ」です。本プログラムは、2016 年度に当時の学生が天売島を訪問した際に始まりました。島民の方々との交流を通じて、離島ならではの地域性や天売島が抱える課題を知り、自分たちに何ができるかを模索する中で、天売島の暮らしや仕事にまつわる歴史を次世代に伝えるための書籍を作成すること、また当時使われなくなってしまった空き店舗の再活用を行うことが提案されました。

2023 年度は、コロナ禍を経て活動が本格的に再開された年となり、事前訪問では、復活した厳島神社祭の準備やお手伝いを通じて、島民の皆様とより深く交流することができました。本訪問では、日中に「交流スペースてん」を運営し観光客との交流を図る一方、夜間には「居酒屋てん」を開店し、地域住民と意見交換をすることで地域課題への理解を深めました。加えて、個人プロジェクトとして動画撮影や観光客へのアンケート調査を実施し、より多角的な視点での取り組みを実現しました。

2024 年度は、これまでの活動を踏まえつつ、新たな要素を加えた取り組みを行い、地域住民や観光客との交流を一層深めました。「居酒屋てん」は 2023 年度に引き続き継続され、さらに宅配サービスを導入することで、店舗に来られない島民との交流も促進しました。また、コロナ禍で先輩方の活動を知る機会が少なかったことを受け、過去の活動を振り返り、その成果を記録として残すためアルバムを作成しました。このアルバムは、新たに参加する学生たちに活動の意義や成果を伝える重要な資料となり、次世代への活動の引き継ぎに貢献しています。

そして、今年度の大きな成果の一つとして、北海学園大学の学園祭「十月祭」に出店することができました。10 月 13 日から 14 日の二日間で、天売島の特産品や私たちの活動を紹介する機会を得ることができ、これにより天売島を訪れたことがある方々や、地域活性化活動に取り組んでいる他大学の学生たちとの貴重な交流が生まれました。

最後に、本プロジェクトにご支援いただいた天売島おらが島活性化会議の皆様、特にコーディネーター役を務めていただいている坂本学様、天売島の島民の皆様、北海道エンブリッジ様、そして北海学園大学経済学部の皆様に、心より感謝申し上げます。

2024 年度　北海学園大学協働フィールドワーク
経済学部地域経済学科 3 年
大弓　叶多

メンバー紹介

3年
大弓叶多

2年
稲上梨奈

3年
山本幸一

3年
西田亮太

3年
齊藤百花

4年
高見海晴

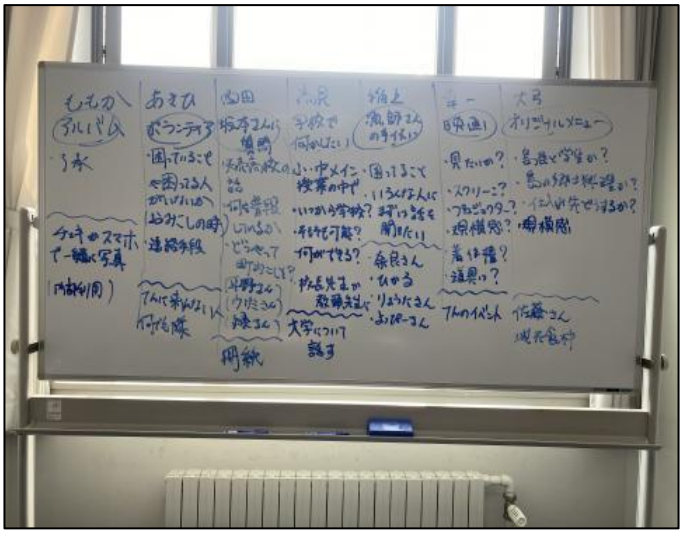
4年
佐藤旭

4~6 月の準備

4 年　高見　海晴

事前訪問までのスケジュールは以下の通りである。

4 月 25 日	メンバー初顔合わせ
5 月 9 日	初回打ち合わせ 昨年の活動を踏まえ、今年はどのような活動をしたいか、何を目標に動くかを 2 年目メンバーで検討した。
23 日	スタートオリエンテーション 講師：北海道エンブリッジ　浜中裕之さん メンバーごとに目標設定を行い、発表した。
30 日	今後の訪問スケジュール確認および訪問準備 8 月訪問の候補日を絞り、6 月訪問のスケジュールも確認した。また、宵宮祭では「叩いて被ってジャンケンポン」や「腕相撲、指相撲」「モグラ叩きゲーム」を行うことも決定し、準備が必要なものも整理した。
6 月 6 日	プロジェクトリーダーの決定、プロジェクトの全体方針の確認 プロジェクトリーダーは大弓くん、事務担当のリーダーは山本くんが務めることとなった。また、浜中さんのアドバイスを受けながら、プロジェクト全体の方針についても明確にした。
13 日	6 月訪問時の質問事項の確認、8 月訪問時の個人プロジェクト案の確認 8 月のプロジェクトに向けて、6 月訪問時の質問をリストアップした。また、宵宮祭の出し物のための小道具作成も行った。
17～19 日	6 月訪問



6 月 13 日のホワイトボード

事前訪問

2 年　稲上　梨奈

日程：6 月 17 日（月）～6 月 19 日（水）

6 月 17 日（月）

9:00	**大学出発（貸切バス）**
13:00	フェリー欠航が決定
15:50	宿泊のため留萌市へ出発
17:00	民泊「海に山に」到着
18:00	宿で夕食

6 月 18 日（火）

	民宿出発
8:30	羽幌フェリーターミナル発
10:05	天売島フェリーターミナル着
終日	厳島神社祭
夜	「B・PORT」にて打ち上げ・懇親会

6 月 19（水）

8:30	**集合・打ち合わせ等**
11:30	「番屋」で昼食
12:30	レンタル自転車で島内一周
15:50	天売島フェリーターミナル発
17:25	羽幌フェリーターミナル着
21:00	大学着（貸切バス）

毎年 6 月 18 日に天売島で行われる「厳島神社祭」と、その前日の「宵宮祭」に合わせ、事前訪問を行った。しかし、羽幌に到着したものの、悪天候のためフェリーの欠航が決まり宵宮祭には参加ができなかった。急な変更のため宿泊場所も決まっておらず、しばし待機の時間が続き、その日は海東剛哲氏が経営する、るもい体験交流施設「海に山に」に宿泊することが決まった。夕食には海東氏のご厚意でカレーライスを作っていただいた。

次の日の早朝、バスで羽幌町のフェリーターミナルに向かった。8:30 に羽幌フェリーターミナルを出発する、第一便に乗れたこともあり、10:05 には天売島に到着することができた。すでに厳島神社祭が始まっていたため、到着後すぐに荷物を宿に置き、参加させていただいた。神輿を担ぎ、休憩を挟みながら夕方まで天売島を歩いて回った。夜になると「B・PORT」でお祭りの打ち上げにも参加させていただいた。食事をしながらの島民の方との交流により、本訪問に活かせるようなお話を聞くことができた。

最終日には「番屋」にて全員で昼食をとった後、初訪問組は自転車を借り、天売島を一周した。2 年目メンバーは去年お世話になった方へのご挨拶など、それぞれの時間を過ごした。そして 15:50 のフェリーで天売島を後にした。

道の駅おびら鰊番屋での写真

厳島神社祭の様子

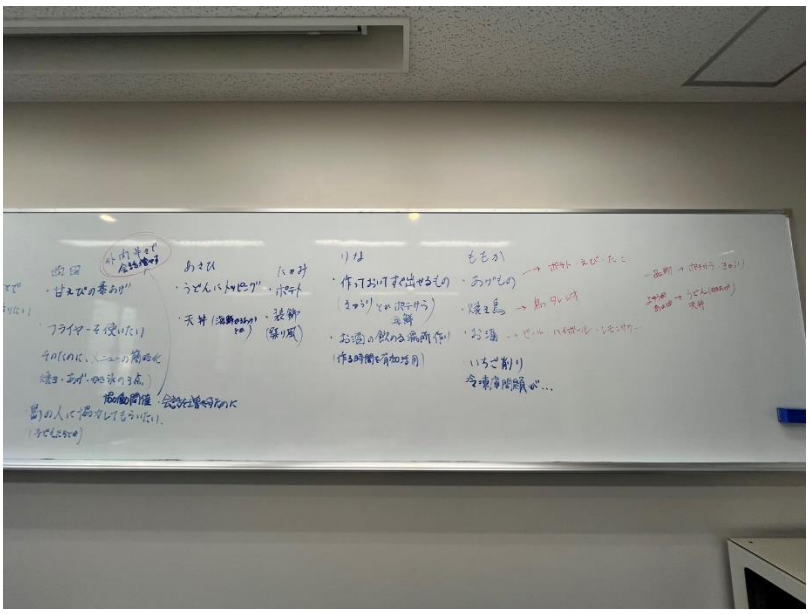
事前訪問を終えて、本訪問に向けて

4 年　佐藤　旭

本訪問時に個人プロジェクトを実行するにあたって、事前訪問で島民の方々に質問した内容とその回答をそれぞれまとめ、さらに 7 月の坂本さんとの zoom 打ち合わせでは、各個人プロジェクトを実現するためのアドバイスをいただき、本訪問で実行する個人プロジェクトの内容を具体化させた。

今年も島民との交流を活発化させるために、交流スペース「てん」を活用し夜間に飲食イベントを行うことが決定した。会計のデジタル化やイベント時の「てん」の動線については去年を参考にして決定したので、今年は主にメニューの内容について話し合われた。当初は島にあるフライヤーを借りて揚げ物のメニューを提供する予定だったが、坂本さんとの zoom 打ち合わせから実現することは難しいと指摘をいただき断念した。代わりに、注文を受けてからすぐに提供できるような作り置きのメニューが考案された。仕入れる食材とその量を決め、本訪問の約一週間前に食材と食器や伝票などの備品の買い出しを行った。

去年発足された何でも隊の今後の方針についても話し合いが行われた。去年の何でも隊は本訪問の途中から発足されたので、依頼件数が少なく認知度も低かったため、今年は島民への認知度と依頼件数の向上を目標に島内の各世帯に設置されている IP 通知端末(通称 IP 電話)に流す宣伝メッセージやチラシの作成を行った。学生メンバー全員が何でも隊の情報を共有できるように、連絡網として何でも隊用のグループ LINE を作成し、何でも隊の組織化を促進させた。

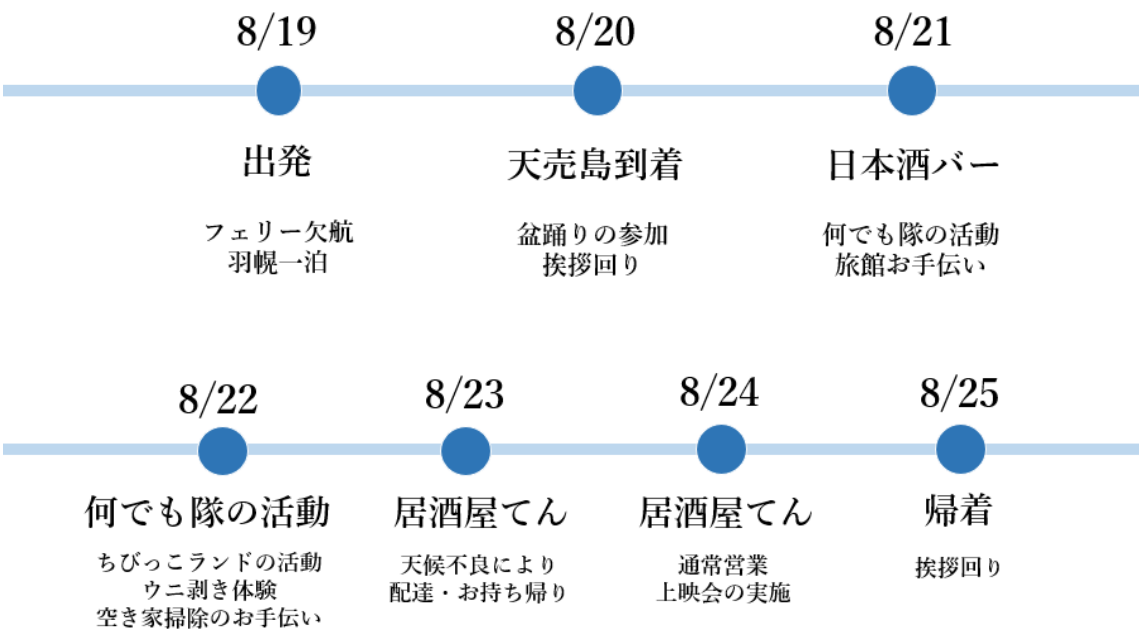


打ち合わせ時のホワイトボード

本訪問

3 年　齊藤　百花

8月訪問スケジュール



本訪問では、19 日に盆踊りの参加を予定していたが天候不良によりフェリーは欠航し盆踊りも延期になったため、20 日に参加させてもらった。今年度は去年から行っている「何でも隊」の活動をあらかじめ宣伝しておくことで昨年度よりも認知度が上がり多くの活動ができた。21 日には大貝健二先生主催の(地域協同フィールドワーク担当教員)の日本酒バーのお手伝いも行い、普段出会うことのない層にも楽しんで頂けた。また個人の興味に合わせて個別活動も行った。

・今までの地域協働フィールドワークの活動を振り返る「アルバム作り」
・おらが島の活動などについて深堀する「インタビュー」
・みんなで協力して夜に営業を行う「居酒屋てん」
・天売島の歴史を振り返る老若男女楽しめる「映画上映」
・去年から継続して活動している「何でも隊」
・天売島の保育園との交流を図る「ちびっこランド」のお手伝い

の大きく 6 つである。 ここからは個別活動、それぞれのプロジェクトごとにまとめを行った。なお、10 月 13～14 日に行われ、7 月メンバーと共に参加した「十月祭」についてもまとめている。

個人プロジェクト―アルバム作り

3 年　齊藤　百花

私がまず個人プロジェクトとしてアルバムを作りたいと思った経緯はコロナの影響で一度活動が途切れ、直接先輩たちから活動を聞き、知る機会が少ないと思ったからである。また、地域協働フィールドワークは 2016 年度から行われている活動であり、過去の先輩たちが行ってきた様々な活動や島民の方々との交流が現在の私たちの活動に繋がっていることを報告書のような文面ではなく、写真で楽しく振り返ってみたいと思ったのである。さらには地域協働フィールドワークに関わっていただいた島民の方々含む多くの方たちにも過去を振り返っていただき楽しんでもらえたらいいなと考えた。この大きく 3 つが、私がアルバム作りを行った目的である。

内容としては先輩たちの過去の活動写真とともにアルバムにし、島民の方も見られるように「てん」にて設置、アルバムの電子化をし、スマホで気軽に見られるようにした。さらに、来年以降も後輩たちにアルバムを更新し続けてもらうことで、今後も活動を振り返られると思うのでぜひ行ってほしいと思っている。

実際に作ってみて、作る過程も楽しく 8 月の訪問時には 2023 年度までのアルバムを作成し持っていき、学生や先生以外にも坂本学さんをはじめとした人たちにも見てもらうことに成功したが、学生が訪問時以外にアルバムを置いて置くことができないことから電子版も作成した（現在は地域協働フィールドワーク関係者内で共有）。また、帰ったらアルバムにしようという意識があり去年よりも積極的に写真を撮っていたように思うのでその点でもよかったと思う。

完成したアルバム

赤：2016-2022
黄：2023~

個人プロジェクト―インタビュー

3 年　西田　亮太

今年はおらが島活性化会議のメンバーに話を聞くことにした。坂本学さん、宇佐美彰規さん、斎藤暢さんの 3 名にお話しを聞いた。組織発足時の話や活動内容、さらには天売島の過去ついても色々と話を聞くことができた。

① 坂本学さん

始めにインタビューできたのは坂本学さん。6 月の事前訪問の際、宵宮祭後の B ポートでの打ち上げ中に行った。まず初めにお聞きしたのは来年開業するコテージの話。外国人観光客が流入による島の環境問題や治安の悪化が懸念されているが、どの程度の影響が発生するかまではわからないという。

おらが島の仕事内容についても質問した。今現在北海道と羽幌町から観光案内所、島内部の遊歩道の草刈り、診療所の清掃などを受託し、これらの仕事を島の高校生や坂本さん達でこなしているという。得た報酬は高校生の給料や組織の運営費に充てており、坂本さんたち役員の方たちは報酬を貰っていないのだとか。

活動の中で大切していることがあるという。それは今あるものを少しでも長く存続させること。無くなってしまった途端、復活が難しくなる。天売のウニ祭りがいい例だという。無くなりそうな行事や企画は続けることを第一に考えて進めるという。

3 人に共通して、それぞれの活動の原動力的なものを聞いた。坂本さんは島の人々、島に来てくれる人々の喜ぶ姿が見たいからだと語っていた。近い将来、おらが島と北海学園の共同でウニ丼世界ギネス記録を目指す企画を考えているという。

② 宇佐美さん

2 日目の夜、皆よりも先にゲストハウスに戻り宇佐美さんにインタビューを決行。いきなりの押しかけにもかかわらず、快く承諾してくれた。宇佐美さんは元々島巡りが好きで全国各地の観光島から離島までたくさん旅行をされていたという。今でこそ天売でのお仕事で旅行の機会は減ったものの、年末の帰省の際に旅行をするそう。たくさんの島を巡った中で天売島のウトウに感動し惚れ込んだという。以来ウトウが見られるシーズンには毎年来島していたそう。その後名古屋でのお仕事を辞め、地域おこし協力隊として天売に移住、ゲストハウスを開業し現在に至る。今はゲストハウスの管理人だけでなく、デイサービスやフェリーターミナルの仕事など、色々な仕事をしている。多忙過ぎて、夏前に一度体調を崩されたそう、周りの人をあまり頼らないようで、フェリーターミナルの駅長さんは心配していた。現在は二つ目のゲストハウスを作るべく、古民家を改装中。

活動の原動力ややりがいは島が、天売島が好きだから。だからこそ来てくれたお客さんに天売島の良さを知って貰えることが 1 番嬉しい。

③ 斎藤暢さん

ウニ漁のお手伝いを暢さんと行っていた際にインタビューを思い切って打診。快く了承して頂き、4 日目の 3 時頃にてんで行った。おらが島代表斉藤ミツルさん。ミツルさんにはおらが島発足の経緯からミツルさんが若い頃の天売島の様子などをお聞きできた。

暢さんが若いころ、その当時は島から出ることを嫌う風潮があった。島を出る際は周囲の大人にどこにいくのか？と頻繁に問われたという。島全体に島から出ることに嫌悪感を抱く人が多かったという。はたまた隣の焼尻島ではそういった風潮はなく、少しの差ではあるが、羽幌町に近い焼尻の方が都会よりの考え方が浸透しているのでは？と暢さんは考えていた。

暢さんは高校入学時に島を離れ三年内地で暮らしたそう。その後長男であったので家業を継ぐべく島に戻った。その後島の立地を生かした遊び、水上ジェットスキーにハマり、熱中したという。島であるが故にジェットスキーの修理を自ら行い、機械を修理することに長けていった。それが今の電気技師のお仕事に繋がっているという。島の人からは、機械が壊れた時は必ず暢さんが呼ばれ、その修理にあたるという。

30 代に差し掛かり、内地に行った同年代が島に帰ってくるようになった。坂本さんもその一人で、その頃から若い衆で集まり島の今後について語り合うようになっていた。昔の大人は廃れていく天売島を羽幌町のせいにしていたが、俺たちは違う、俺たちがやらなければいけないと思ったそう。当初は羽幌町からの助成金を得けるための組織としておらが島活性化会議を設立。その後視察先の海士町で多くの刺激を受け、やってみたい事を最優先に活動を活発化していった。クラウドファンウンディングなど、様々な人に協力を仰ぎ活動をした。以降、天売高校存続のサポート、島の植林、ゴメ岬の清掃、北海学園大学との提携、シーカヤック体験など多くの実績を残してきた。

総括

去年に引き続き誰かに質問をして記録するということを行った。島の人から貴重な話を聞いても記録に残す人がいないので、割と大事な企画だと考えている。今後も行っていきたいと考えている。

3 人のお話を聞いて、共通して自己犠牲精神的なもの感じた。自分の時間を削ってでも他人のために全力で行動できる、そんなものを感じ取った。しかし本人たちは自己犠牲なんて微塵も考えていないだろう。やはり地域を本気で盛り上げようとしている人たちはこのような人たちなんだと実感した。

本訪問―居酒屋てん

2 年　稲上　梨奈

居酒屋てんとは「てん」という名前の交流スペースを用いた飲食イベントである。現在、天売島には夜間に営業している飲食店がないため、私たちが居酒屋を営業し、島民や観光客の方々と交流をしたいという思いで 2023 年度から始まった。しかし、昨年は初めての営業ということもあり、学生たちが交流のために使える時間や余裕がなかったため、今年の営業では学生全員が来てくださったお客様と会話できる時間を設けることが目標として掲げられた。

この飲食イベント開催のためには多くの時間と労力を要した。特に今年提供するメニューの考案のために何度も打ち合わせを重ねた。学生が出したいメニューは「てん」のスペースで調理・提供することは可能なのか、短い営業時間で採算が取れるのか、島民の方にとって需要はあるのか、など考えなくてはならないことが山積みであった。結果、主軸は昨年と同じく焼き鳥に置き、その他新たなメニューとして、「棒棒鶏」や「やみつききゅうり」、「鶏皮ポン酢」といったおつまみメニューを増やした。また、昨年好評であったいちご削り・マンゴー削りは日替わりの限定メニューとして用意した。特におつまみメニューは事前に調理を行い準備しておくことが可能であったため、焼き物よりもスムーズな提供が可能であった。

仕入れなどは主に昨年の営業を参考にし、備品や調味料など事前に購入できるものは分担して持ち運び、大量の焼き鳥などの天売島での仕入れは川口商店さんにお願いした。その他の長く持たない食材や天売島では購入できないものなどは羽幌町のコープで購入し、冷凍品は居酒屋てんの営業に確実に間に合うよう、フェリーが欠航する可能性も視野に入れながら配送を依頼した。また、営業日や時間が決まったタイミングで IP 電話での宣伝を行っていただいた。加えて、直接島民の方とお話する中で宣伝させていただいたり、あらかじめ宣伝のチラシを作成し、現地に到着したあとにできるだけ多くの島民の方の家に配ることで、飲食イベントの認知度を高めることができた。

↑配ったチラシ

居酒屋てんは 8 月 23 日と 8 月 24 日の 16:00～20:00 の時間帯で営業した。

初日の 8 月 23 日は、悪天候に見舞われたため、当初予定していた店内飲食を断念し、急遽、宅配とお持ち帰りのみの営業形態に変更することを決定した。メニューも、調理が比較的容易で、移動に適した「焼き鳥」「豚串」「つくね」「肉巻きおにぎり」といった焼き物に限定した。急な変更であったが、初日から多くの島民の方が来てくださり、島民の方々がとても楽しみにしてくれていたことを実感した。

また、今年は宅配サービスについて事前に周知を行い、前日から電話等での予約があれば指定された時間、場所へ直接持っていくという形式をとり、数件の利用があった。その際、学生だけでは対応しきれない住所情報の問題を、島民の方々との協働によって解決し、これは昨年と比べ大きく改善できたことの 1 つである。

翌日、8 月 24 日は天候にも恵まれ、通常通りの営業が出来た。そのため、提供するメニューの準備は午前中から行っていたが、2 日分の焼き物やおつまみの準備には、予想をはるかに超える時間と労力を要した。営業開始直前まで慌ただしく作業を続けるという、かなり不安定なスケジュールとなってしまった。そのため、来年以降にこのような活動を行う際はさらに時間に余裕を持たせたスケジュールを立てる必要があると感じた。

8 月 24 日の営業は昨年以上の大盛況であり、昨年来てくれた観光客の方が今年もこのイベントがあるということで再度訪問してくれるなど、地域との関係性構築という目標も達成できた。しかし、来店される方の多さやメニューの数も豊富であったことから学生のみでは対応が困難な場面があり、その際には島民の方々がオーダーを取ったり、料理の運搬を支援して下さったおかげで店舗が回っている場面が何度かあり、協働で物事を行うことの重要性を実感した。

収支については、若干の赤字となったが、島民との交流する場を作ることが出来たのは非常に大きな経験であった。

今年の活動の中で特に良かった点として、役割分担の明確化が出来たため、すべてのメンバーが島民と直接対話する機会を持ち、島の魅力や課題について、それぞれが質問したい内容について聞くことが出来ていた。

今後は、今回の経験を踏まえ、さらなる改善と地域との連携強化に努めていくことが出来ればと考えている。

↓　営業準備の様子

↓　営業中の様子

個人プロジェクト―上映会

3 年 山本　幸一

初めに今回交流スペース「てん」で行った上映会の目的について説明する。目的としては、実際に昨年度と今年度に訪問させていただいたときに天売島には娯楽施設がないと感じ、少しでも島民の方々が楽しめることができ、学生と観光客と島民の方々にとって 1 つの思い出に残るようなイベントを考えたかったからである。次に内容は、上映会を行うにあたって多くの人に興味を持っていただくために、6 月訪問の際に坂本さんと打ち合わせでアドバイスを受けた結果、若者からお年寄りまで興味を持ってもらうために 1 日目は、天売の歴史の資料映像に決まり、資料映像は北海道立図書館から貸出を行った。2 日目は、若者向けに新海誠監督の「彼女と彼女の猫」を 2 日間に分け、また、多くの方に見ていただくために居酒屋「てん」の営業終了後に上映を行うことにした。

そして、上映に向け準備をしてリハーサルを行い、上映会 1 日目を迎えたが悪天候の影響を受け中止になってしまった。2 日目に向けて見に来て下さる人がどれくらいいるのかを 1 日目で把握したかったが、できなかったためとても不安な気持ちのまま 2 日目を迎えることになった。そして 2 日目は、天候にも恵まれ、無事開催することができた。時間の都合上、天売の資料映像のみの上映だったが、たくさんの人が見に来てくださった。また、上映後には島民の方々から上映会を開催したことや上映の内容についてよかったよと声を掛けられてこのイベントを開催する意味があったと実感することができた。

リハーサルの様子

次にこの活動を通しての反省点は、飲食イベントの終了後に上映したが混雑した時の対応を想定していなかった点である。ラストオーダーの時間と閉店時間がほぼ同じような形になってしまった結果、混雑してしまい上映会を行うどころではなくなってしまったことで上映会の時間をのばさなくてはいけなくなった。このことは次にこの活動を行うときに注意しなければいけない点であると考えた。また、この上映会を行ったことで島民の方々だけでなく、そして学生にとっても新たな経験になったと思う。島民の方々にも好評であり、私がこの取り組みを行う前に想定していた、上映会を行うことで「その空間と雰囲気をみんなで楽しむ」というのが現実化できたのではないかと考える。この活動は今後に繋がる活動であり、毎年の恒例イベントになってほしいと思う。

実際の様子

個人プロジェクト―何でも隊

4 年　佐藤　旭

今年も去年に引き続き何でも隊の活動を継続していくことに決定し、認知度の向上と依頼件数を増やすことを目標に、チラシや島内に流す IP 電話に流す宣伝メッセージを作成した結果、去年よりも依頼件数が増えることに成功した。

具体的な活動内容としては、旅館や古民家の掃除、漁師さんの手伝い、フェリーターミナルの自販機の補充、ちびっこランドの窓に耐熱シートを貼るなど、今年は去年以上に依頼件数が増え、何でも隊の活動としては充実したものとなった。

はじめに依頼を受けた旅館へは、学生メンバーのうち 4 人が向かい、主にトイレやお風呂の清掃を依頼され、1 時間かけてすべての行程を終えた。汚れていた箇所がきれいになり清潔な空間になっていく過程や依頼した方から感謝の言葉をいただくことにやりがいを感じることができた。

ウニ漁の様子

古民家の掃除

ウニ漁のお手伝いでは、2 日目の夜に宇佐美さんから 3 日目の朝にウニ漁が行われることを伝えられ、お手伝いを行った。そして、ウニ漁から帰ってきた船からかご一杯に入ったウニを引き上げて選別を行い、kg単位で計ったものを出荷する流れであった。引き上げる作業では多くのウニを手動で引き上げるためかなりの重さであり、負担が大きいと感じた。また、ウニの選別では人数も必要であり年配の方が多くいたことから、将来作業をする人数が減少したときにどのような形で行われるかが気になる点である。

今回の活動で反省点として挙げられたのが、学生を手伝わせることに対する島民の遠慮意識が高く、依頼しにくい空気だった点である。島民の方々が私たちに声をかけやすいような雰囲気づくりをしていくことが今後何でも隊を続けていく上での課題だと感じた。

何でも隊の活動がこれから先も長く続くように、私たちが経験してきたことをここに伝え、次世代の活動に役立てていきたい。

個人プロジェクト―ちびっこランド

3 年　山本　幸一

初めに、保育園「ちびっこらんど」での活動の目的について説明する。目的としては、天売島プロジェクトとは今まで関わりがなく、今後の活動に活かせると考えた。そして、この活動を将来的に考えて、発展できる取り組みだと考えたからである。また、私自身、子どもと関わるのが好きで、教育について興味があったからというのも今回活動しようと考えたきっかけである。活動内容は、暑さ対策のため園内の窓ガラスに耐熱シートを張る作業のお手伝いや玄関周りの掃除を行った。また、園児とのふれあいも行い、おままごとや読み聞かせを通して園児との交流を深めることができた。

園児とのふれあいの様子

また、職員である福島さんにちびっこランドについてと園児たちとの関わりについてお話しをお聞きすることができた。まず、保育園の状況については働き手の確保の難しさについてお聞きした。福島さん自身も島の出身ではなく息子さんが天売高校に進学したのをきっかけに移住したことで現在の職に至ることを教えていただいた。また、保育士として勤務されている方も島外出身の方で、旦那さんの転勤先の学校が天売島になったことで一緒に移住したのがきっかけであることも分かった。福島さんは、募集をかけていても、やはり住む環境のことを考えると応募する方が少ないのは仕方ないとのことだ。次に、子供たちの教育方針についてお聞きしたところ、このようになってほしいという理想は描いておらず、逆に子供たちにそれらを求めてはいけないとのことだ。子供達には自分らしく成長できるようにそれぞれに合った遊びや関わり方を考えながら毎日過ごしていることが分かった。

ちびっこらんどでは少人数だからこそ一人一人に合ったことができるし、けがや揉め事があったときもすぐ対処できる一方で、集団心理が使えないからこそスムーズに次の行動に移行することが難しいということは、今回お話を聴いたのと実際に子供たちと交流した時に実感することができた。また、園児たちが職員の方々に愛されているのが短時間でもわかり、天売島だからこその教育の形を発見することができた。

本訪問を終えて

3 年　西田　亮太

今年は初日からフェリーが欠航し、6 日間の滞在となった。羽幌のサンセットプラザにて一泊し、そこで羽幌町観光協会の平野さんからプロジェクトへの助言を頂き、来島時のプロジェクトの再確認を行った。丁度札幌への用事のために羽幌に滞在していた坂本さんとも合流でき叱咤激励を受けました。翌日のフェリーは予定通り出港し、無事天売島に到着できた。

1 週間の本訪問を通して、去年の経験がとても生きていたように感じた。顕著なのは島の人々への我々の認知度が上がっていたこと。ビラ配りをしている際、我々の活動、さらには顔まで覚えていてくれていた人までいた。これにより学生自身も去年より積極的に島の人々と交流できた。特になんでも隊の活動は認知度と依頼件数が大きく増加し、1 年目の活動の成果を実感した。他にもお酒の許容量が格段に増え、島民の方とお酒を交えたコミュニケーションができた。さらに活動だけでなく、ゲストハウスでの共同生活にも慣れ、島での生活に適応していた。常にお仕事の依頼を探した結果、空き時間が殆ど無くなり、常に何かに取り組み続けた 1 週間となった。稲上さん以外の 6 名は今年が最後であったが、来年もさらにその先も天売島と関わっていきたいと思うほどに天売島について詳しくなった。

交流スペース「てん」の前で撮影した集合写真

十月祭

3 年　大弓　叶多

十月祭は、北海学園大学で毎年開催される学園祭である。2024 年度は 10 月 13 日から 14 日の 2 日間にわたり実施され、コロナウイルスの影響により規模の縮小が余儀なくされた状況であったが、私たちは無事に出店を果たすことができた。

今回の出店には 2 つの明確な目的が存在した。1 つ目は、「天売島の知名度向上」である。学生をはじめとした若年層の間では、天売島の名前を知らない者が多い。そのため、天売島の新鮮な海産物を使用した特別感のあるメニューを提供し、「天売島」という地名の持つ珍しさや魅力を伝えることで、多くの人に関心を抱いてもらうことを目指したのである。2 つ目は、「地域協働フィールドワークの知名度向上」である。この活動は、学生の目線から地域活性化を目指す取り組みであるが、その存在を知らない学生が多いのが現状である。そのため、活動内容を説明する看板を作成し、ブースでの販売とともに来場者に直接声をかけ、活動の周知を図った。これら 2 つの目的を通じて、天売島の魅力と地域協働フィールドワークの重要性を広く発信し、将来的な地域活性化への貢献を目指したのである。

しかし、出店準備の過程ではいくつかの課題に直面した。その 1 つが「メニューの選定」である。露店販売の規制や食中毒防止の観点から、複雑な調理は避ける必要があった。また、300 食以上の食材の仕入れや仕込み、当日の調理・提供方法についても慎重な計画が求められた。特に私たちは海産物を扱うため、新鮮さを維持しつつ大量に提供できる方法を模索する必要があった。この課題に対応するため、天売島の坂本学さん、羽幌町観光協会の平野健司さん、さらには過去に同活動で出店経験を持つ OB の方々に助言を求めた。その結果、「タコ串」と「エビ汁」の 2 品を提供することに決定した。

食材の仕入れに限らず、タコ串に使用するタコの下処理や串刺し作業については、坂本学氏の多大なる協力により実現した。これにより、天売島の豊富な海産物を活かしたメニューを実現し、学園祭という環境に適したメニューを提供することができた。さらに、ブースには天売島の概要や地域協働フィールドワークの活動内容を記載した看板を設置し、訪問者に活動への理解を深めてもらう工夫を施した。

出店当日は、多くのお客様と直接会話を交わす機会を持つことができた。その中で、「天売島の存在を初めて知った」「活動を参考にしたい」といった声を多くいただいた。このような反応を通じて、今回の出店が「天売島の知名度向上」と「地域協働フィールドワークの認知拡大」の両面で成果を上げたと確信している。特に、学生や他大学の関係者からも「活動に参加してみたい」との声が寄せられたことは、今後の活動の可能性を広げる大きな手応えとなり、次世代に向けた継続的な地域活性化の可能性を感じさせるものであった。

十月祭の際に作成した看板

おわりに

今年度の活動は、4 年生 2 人、3 年生 4 人、2 年生 1 人の計 7 名で活動を行いました。昨年度に比べると 2 年目のメンバーがほとんどであり活動を行う中での不安はそこまでなく、全体プロジェクトでの話し合いもスムーズに行うことができたのではないかと感じました。また、学年関係なく自分の意見を出し合い、互いの意見を尊重できたことで、メンバー内の関係性も深まり会議から現地での 1 週間をより充実したものになりました。

全体プロジェクトとしては昨年度に引き続き今年度も「居酒屋てん」を開催しました。今年は通常の営業に加えて宅配サービスを導入し、島民の方の協力もあり店舗に来られない人への宅配をすることができました。また、提供するメニューは昨年とは違うメニューで島民の方に楽しんでいただくためにやみつきキュウリや棒棒鶏などメニューの増加を行いました。昨年とは異なることもあったため、忙しくなることもありましたが島民の方々のサポートのおかげで無事に営業することができ、島民や観光客の方々との交流も学生全員が行うことができました。

個人プロジェクトは、個人的になりますが満足いく形で終えることができました。昨年度は天売高校の調査を行い、今年度は交流スペース「てん」での上映会とちびっこランドの調査と園児とのふれあいを行いました。昨年度の天売高校の調査は自分自身の力不足もあり不完全燃焼で思うような活動はできませんでした。しかし、今年度は事前訪問の時点で自分が行いたいプロジェクトと天売島の地域活性化にとって必要なプロジェクトを明確化していたことでそれに向けた準備、行動ができたことによって、本訪問の際は大きな問題もなく無事にプロジェクトを達成できました。また、他のメンバーも自分がやりたいことと天売島の地域活性化になることを各々よく考えて行動できており、それぞれの活動が良い影響を与え合っていたのではないかと感じています。

最後に、このような充実した活動ができるのも多くの人達がサポートしていただけているからだということを 2 年間の活動で身に染みて感じています。島民の皆様、教職員の皆様、関係者の皆様には大変お世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。来年度で地域協働フィールドワークは 10 年目を迎えます。この 10 年間の活動の経験や出来事を来年度以降も引き継ぎ、やってよかったと思える活動ができるよう後輩のサポートを行っていきます。今後もご迷惑おかけすることもあると思いますが、チームで協力し合い、よりよい活動を目指し尽力いたしますので、今後ともお力添え頂ければ幸いです。

2024 年度　北海学園大学地域協働フィールドワーク
経済学部地域経済学科 3 年
山本幸一